日本文学部会

【概要】

羅　　小　如*

第12回国際日本学コンソーシアム日本文学部会は、12月11日午後に開催された。大学院生の研究発表５本、大学教員による講演４本という大変充実した構成となった。なお、大会テーマは「壁をこえる」であった。以下、登壇順に各発表、講演、そして質疑応答の概要を紹介する。

⑴　包祐寧（国立台湾大学院生）「『雨月物語』「夢応の鯉魚」における鯉魚の放生について」

包氏は、「夢応の鯉魚」における放生行為に焦点を置き、主人公である興義の内面的変化や動機などを分析した上で、作中の二回の夢の意味を論じた。苦痛のある鯉魚の世界を体験したことから、二回の夢は異質なものであるとの見方が提示された。現実世界への理解を通して更なる高い芸術性を志向する「夢応の鯉魚」像が提起された。質疑応答では、先行研究との差別化に注目した質問が寄せられた。論の独自性をより明確にするための再確認などが行われた。

⑵　胡潁芝（お茶の水女子大学院生）「漱石文学における「縹渺」―『虞美人草』の「縹渺のあなた」について―」

胡氏は、唐詩や説話といった中国の古典と、漱石の漢詩や小説などから丁寧に用例を引きながら、「縹渺」の意味を探り、漱石文学における「仙境」の特質を論じた。「中身」と「実体」がない仙境は、明治の知識人の近代化への不安を象徴していると結論した。質疑応答では、「実体がない」または「中身がない」仙境と、そうではない仙境の違いについて、「実体」の更なる説明を求める質問が寄せられた。発表者は桃源郷などを例にして、その実在の度合いの違いに詳細な説明を加えた。また、会場からは漱石文学における「縹渺」の中身についての質問が寄せられた。対象となった漱石が作った漢詩には発表時期が異なる用例もあるため、意味の変化の可能性が指摘された。発表者もそれに同意した。

⑶　林京華（国立台湾大学院生）「『門』小論―宗助に見る他者性の揺れ―」

林氏は、様々な「相対化」を有する『門』の作品構造を踏まえて、「他者」や「自己」、「社会」と言った対立項目の間に起こる「コミュニケーション」に着目し、宗助にどのような影響を及ぼしたのかを辿った。コミュニケーションは避けられないものであって、宗助は「他者」との交流を通して自己への認識を再確認し、夫婦の間の一体的な世界もコミュニケーションによって裂け目が出来た、と結論した。質疑応答では、発表の構成を再確認したいとの質問が寄せられた。

⑷　ユルコヴィッチ・トマーシュ（カレル大学院生）「過去という壁を越えた村上春樹の小説の主人公」

ユルコヴィッチ氏は、今回の文学部会のテーマに沿って、『ダンス、ダンス、ダンス』を中心とした村上春樹小説における壁についての発表を行った。日本の近代史を隠喩的に語る『ダンス、ダンス、ダンス』の最後の場面において、主人公が古いホテルの「真っ黒い廊下」から、壁を越え

＊お茶の水女子大学大学院院生

ていくことに成功したのは、村上文学の重要なターニングポイントであったと論じた。質疑応答では、主人公が乗り越えた「壁」の具体的な意味を再確認したい質問が寄せられた。発表者は、論旨である「壁」の意味を改めてまとめてくれた。

⑸　杉江扶美子（パリ・ディドロ大学院生）「向こうからの声たちと小説をこえて―いとうせいこう『想像ラジオ』と木村友祐『イサの氾濫』において―」

杉江氏は、東日本大震災後に発表された二作品を取り上げた。大きな災害に直面した際、文学作品、作者及び読者のありようを考察した。フランスでの日本研究の最新情報も合わせて紹介した。聞こえない死者の声と、東北への搾取構造に着目し、いま現在起こっている文学のあり方を改めて問題提起するものであった。質疑応答では、「想像」とは何か、東日本大震災の特殊性とは何かなど、多数の質問が寄せられた。災害と文学の関わりや影響などについて、盛んに議論した。

⑹　金学淳（高麗大学）「日韓の貸本文化―読者と広告を中心に―」

金氏は、日韓の貸本文化に着目し、当時、流通経済商品として成立した書物が持つメディア機能を考察した。読者層の拡大と続き物などを通して、書物は一種の広告塔のような機能も持った。特に売薬の広告がよく見られる。日本と韓国の東アジアにおける前近代期の貸本文化を総合的に考察した。

⑺　ティララ・マルティン（カレル大学）「落窪の君が壁を越えた時」

ティララ氏は、代表的な継子譚「落窪物語」について複合的に分析と検証を行なった。西洋の視点を取り入れて、「落窪物語」は継子譚の話型を越えたものと論じた。また、物語の主人公が別にあると考察した。「落窪物語」の位置づけを明確にした上、大会テーマに沿って落窪の君が破った壁などについて分析を行った。会場からは、論の斬新さが評価される声が寄せられた。

⑻　朱秋而（国立台湾大学）「江戸後期の関東詩檀―市河寛斎を中心に―」

朱氏は、菅茶山と陸游の作品を通して、関東詩人市河寛斎の詩風について比較考察を行った。日本の漢詩人たちが、漢詩固有の表現を摂取、消化した後、漢詩といった形を通して、日本独自の表現の仕方を新たに編み出した。ご講演では、寛斎を筆頭に、三人それぞれの漢詩を比較して、言葉の奥に潜む繊細な変化を丁寧に辿った。

⑼　范淑文（国立台湾大学）「真杉静枝文学に語られる「壁」―「烏秋」、「母の傑作」の主人公たち―」

范氏は、日本でまだ研究対象とされることが少ない女性作家真杉静枝の作品を取り上げた。「烏秋」、「母の傑作」に描かれた女性の人生を分析し、その時代性を考察した。二作は関連性のある作品と見て、女性たちが「壁」を越えることを中心に詳細な分析を行った。また、悪女のラベルを取り除き、早い時期から真杉文学を真摯に評価してきた台湾側の日本語文学研究動向をも紹介してくれた。会場からは、「台湾アイデンティティー」という言葉が、真杉文学における妥当性についての質問が寄せられた。真杉文学と「台湾アイデンティティー」とは、どう見るべきかが議論された。

今回の日本文学部会は、扱う時代が古典から近現代文学まで揃え、内容もアジアからヨーロッパの日本文学研究動向を幅広く取り入れて、多彩多様且つバランスのとれた構成を見せた。質疑応答において、本学の院生や学部生、そして登壇者と教員から有意義な質問が多数寄せられた。発表数が計９本もある大盛況の中、与えられた時間を最大限に活かし、盛んに意見の交流ができた。グローバルな視点において、日本文学研究は各国の研究者の間でどのように討議されているのか、この場を通して今一度考えさせる貴重な機会を得た。参加者の皆様に厚く御礼を申し上げたい。